

チャイルドサイエンス, 2019, 18, 15-20

## 講演後記

## 子どもの貧困と子ども学

講師：安藤寿康（日本子ども学会研究開発委員会委員長、日本子ども学会副理事長）

子どもの貧困の問題は、子ども学として取り上げなければならない数々の問題の中でも、その緊急性と重要性において、最も力を入れて扱っていくべき課題だという認識を持っていた。しかし、これに必ずしも十分に組み合わせてこなかったという負い目が、日本子ども学会研究開発委員長・副理事長として、ずっと心のうちにあった。

日本子ども学会がそれを真正面から取り上げたのは、2010年の第7回子ども学会議の中で「子どもの貧困を根絶していくために」（座長：木下真）と題されたシンポジウムだった。その中で「子どもの課題と貧困」（松本伊智朗氏・北海道大学大学院教育学研究院教授）、「子どもの貧困を防ぐための政策課題」（馬咲子氏・参議院企画調整室調査員）、「高校を中退する子どもたち」（青砥恭氏・埼玉大学・明治大学講師）、「貧困とネグレクト—小児歯科医療の現場から—」（森岡俊介氏・日本歯科医師会理事）（肩書きはいずれも当事）と、多様な角度からの検討を行ったものの、それ以降、十年近くの間、われわれは手をこまねいて、事態の悪化を遠くから見守ることにとどまっていた。

子どもの科学としての日本子ども学会のこの問題への使命は、現象としての子どもの貧困の実態について、学術的・科学的に妥当性の高い認識に迫ることであると思う。

私は行動遺伝学が専門なので、子どもの貧困について専門的な研究も活動も行ってきていないが、自分たちが実施した大規模な双生児の調査の中で、親の収入と子どもの学業成績や進学意欲との関係を統計的に分析したところ、年収300万円あたりを境に、子どもの置かれた教育状況が格段に悪化していることがはっきり見てとれ、事態の深刻さを実感していた。

親と子の間の、ふつう家庭環境要因によるものだろうと考えられがちな相関関係を行動遺伝学的に調べると、たいがいそれが環境要因よりも遺伝要因によって説明されることが示され、世間をがっかりさせてしまうのだが、親の収入や社会的地位についてだけは、遺伝要因を統制してもなおかつ環境要因としての家庭の状況がはっきり検出される。欧米の大規模な双生児研究では、年収や社会的地位の高い層では、知能や学力

の個人差を説明する大きな要因は遺伝だが、低い層では逆に家庭環境の差のほうが遺伝よりも大きな影響力をもつことが示されている。

たったこれだけの学術的知見ですら、貧困であることが子どもにどれほどの劣悪な生育条件を生み出しているかがわかる。それは明らかに遺伝だけではなく環境条件の差が大きい。行動遺伝学者がこれほどはっきり環境の重要性を訴えることのできる事象は珍しいのだ。だからこそ、もっと詳しく「子どもの貧困」という名の下で、何が実際に起こっているのか、その実態の正確な認識をもたねばならないと思いつけてきたのである。

とはいえその射程範囲は、社会学・経済学・心理学・法学・行政学・医学・教育学・保育学、そして脳科学などと、学術領域だけでも多岐に渡り、この問題に現場で取り組んでいる活動も、今日きわめて多様性に富んでいて、いったいどこからどう手をつけてよいかわからないまま、手をこまねいていた。

それがこのたび第10回子ども学カフェを企画するに当たり、本年度の子ども学会議のテーマ「友だちってなんだ」にちなんで、子どもたちが集い、そこに子ども学が取り組むべき重要なテーマが現れている何かを探す中で、貧困がつなく友だち形成の場としての「子ども食堂」が浮かび上がってきた。

子ども食堂が今日、全国的な展開となって社会的に注目されていることで、その活動を精力的に行っている実践者が数多くいることはわかっていた。しかし、個別の実践報告やその重要性の訴えだけでなく、その実態を子ども学らしい学術的な視点から科学的に把握している話題提供者にたどり着くことは難しいと思った。それは、全国的な統計の単なる紹介にとどまれば本質に迫れない。藁をもつかむつもりで、子ども食堂の全国組織「NPO 法人全国子ども食堂支援センター」のホームページの問い合わせから、こちらの趣旨を伝えて、どなたか適切な方を紹介してほしいと依頼をした。そのとき、日本の貧困問題の第一人者である湯浅誠氏が理事長であるを知り、この方が最適であろうという考えは頭をよぎったが、その高名と想像される多忙さから、湯浅氏に直接お願いすることは端か

ら無理と思って、とにかくどなたでも結構ですという必死の依頼文を送った。

その依頼に、ほとんど間髪いれず、湯浅氏ご本人から承諾の返事が来て腰を抜かした。この方はほんとにすごいと思った。われわれの学会としての趣旨を理解し、すぐに対応してくださるフットワークの軽さ。改めて、自ら名乗っておられる肩書きの筆頭にある「社会活動家」とはこれかと実感した。

2019年春に行われた「子ども学カフェ」の講演で、湯浅氏は筋金入りの社会活動家として、その活動範囲は全国におよび、興味深い実践例をたくさん紹介しながら、こども食堂が、貧困問題対策だけでなく地域交流の拠点としても重要な機能を果たすこと、明らかにそれとわかる赤信号の貧困問題ではなく、日常の中に潜伏している黄信号の貧困こそ、社会が一丸となって取り組まねばならないことなど、重要な論点を見事に整理してくださった。

こども食堂と、そこに集う子どもたちが、子どもたちだけの閉じた問題空間を形成しているのではなく、多世代交流の中のひとつの様態として理解され、社会インフラの中に位置づけられねばならないことが鮮明に印象付けられると思う。

この視点は、本年度の子ども学会議のテーマ「友だちってなんだ」を考える上でも大切な、子ども学的な切り口になると思われる。

#### 〈プロフィール〉

安藤寿康

1958年、東京都生まれ。慶應義塾大学文学部教授。日本子ども学会副理事長。慶應義塾大学文学部卒業後、同大学大学院社会学研究科博士課程修了。教育学博士。専門は行動遺伝学、教育心理学、進化教育学。慶應義塾ふたご行動発達研究センター長を務め、1万組を超えるふたごのデータから、行動と心の発達に及ぼす遺伝と環境の影響に関する研究を行っている。主な著書に『日本人の9割が知らない遺伝の真実』（SBクリエイティブ）、『遺伝マインド』（有斐閣）、『遺伝と環境の心理学』（培風館）、『遺伝子の不都合な真実』（筑摩書房）、『「心は遺伝する」とどうして言えるのか』（創元社）、『心はどのように遺伝するか』（講談社ブルーバックス）などがある。最新刊『なぜヒトは学ぶのか』（講談社現代新書）。